

『学会見聞記』

第55回米国核医学会に参加して
Impression of the society of nuclear medicine
55th annual meeting

奥田 光 一

到着直後のトラブル

第55回米国核医学会は、2008年6月14日から18日までの間、アメリカ南部のニューオリンズにて開催されました。会場は Ernest N. Morial Convention Center でした。

今回は初めての国際学会ということもあり、出発当日から緊張気味でした。成田空港から無事出国し(ハブニングその1: 実は成田空港でネクタイを忘れたことに気づき、空港内にて購入しました。)、アトランタを経由してニューオリンズに夕刻に到着しました。日本の真夏のような暑さと湿気が肌を覆うなか、Airport shuttleに乗り、宿泊ホテルまで無事に到着しました。

頭の中はベッドに飛び込む姿を想像しながら、ホテルのフロントにて予約の確認をお願いしたところ、“予約が入っていません。”との事(ハブニングその2)。ここで引き下がっては日本男児の恥とのことで、つたない英語で必死に説明しました。日本の旅行会社の予約ミスがあったにもかかわらず、無事宿泊できることになったのですが、チェックインした時間は深夜の10:30でした。

Annual Meeting開始

翌日は時差ほけのため早朝に目が覚め、残しておいた昨晚のサンドイッチを食べ、会場に向かいました。Registrationを済ませ、明後日のポスター発表のため、ポスター会場に急ぎました。ポスター会場に入って、まず驚いたのは会場の大きさです。日本のポスター発表の規模とは、比べ物になりませんでした。おそらく全てのポスターに目を通すことは不可能ではないかと思いました。幸いなことに私のポスターは比較的入り口から近い場所であったため、人目に付き易く、たくさんの方に見てもらえるのではないかと期待しました。ポスターの概要をまとめたチラシを設置し、それが学会の閉会までに無くなることを願いながら、ポスター会場を後にしました。

夕方セッションまで少し時間に余裕が出来たため、ニューオリンズの街を観光しました。フランスの植民地の影響が残る建物を眺め、JAZZを聴きながら食事を取り、ニューオリンズを満喫しました。

ポスター発表にて

今回、私は幸運な事にポスター発表をする機会に恵まれました。題目はEffect of attenuation correction on normal myocardial perfusion SPECT database using SSPAC methodです。内容を概略しますと、核医学検査は放射性同位元素を体内に注入し、各臓器のシンチグラムや機能、動態を計測する検査方法であり、投与された放射性同位元素からの γ 線は被験者の体内において吸収されるため、この吸収を補正するために一般的にはX線CTから得られる体内の吸収分布を使用します。しかし、本研究はX線CTを使用せず、核医学検査から得られる情報のみを用いて吸収補正を行う方法を提案しました。

ポスター発表の時間は3日目の14:30~15:15までの45分間でした。簡単な英語のコミュニケーションもままならない私にとって、45分間はとて長く感じられましたが、実際に開始すると

一瞬の間に過ぎ去っていきました。また発表にあたり、YES、NOをはっきりする事を常に心掛けました。

ポスター発表も終盤に差し掛かった時に、今回の最大の山場が待っていました。事前の情報ではポスター発表中にChairmanが巡回し、研究結果について質問する場合もあるとの事でしたが、本当にやって来るとは夢にも思いませんでした。自己紹介をした後に、どのような質問を受けるのか不安でいっぱいなのに、“研究の概要を教えてください。”との事。一瞬、頭が真っ白になりそうでしたが、事前に概要を英訳していたため、思い出しながらしどろもどろな説明を始めました。不器用な英語にも関わらず、Chairmanは相槌を打ちながら発表を聞いてくれました。また、Chairmanからの質問については75%程度、受け答える事が出来ました。

この山を乗り越えてからは、少し自分自身の中でふっ切れたようで、発表時間の最後には、相手の質問に対して“Good point!!”と相槌を打てるようになるまで、コミュニケーションが上達したように思いました。

Annual Meetingを通して

日本と比べアメリカは検査対象の人口数が多く、保険制度の違いを考慮しても、機器の開発スピードや多種多様な放射性薬剤の研究等において日本の一歩先を進んでいるように感じました。しかし、日本のグループがアメリカの研究グループに引けを取らない研究結果を発表していたことを考えると、一概に保険制度等の影響とは考えづらく、研究者のpassionによって如何様にもなることが分かりました。まず、現在研究を行っている臨床的な画像処理において世界一とまではいかななくても、日本一を目指して頑張りたいと思いました。

